

【研究者】 小宮 京

(助成決定時) 東京大学大学院 法学政治学研究科 博士課程

【研究題目】

鳩山一郎と戦後政治 自由民主党の成立

【研究の目的】

自民党政治は、軽武装と経済重視(通常「吉田ドクトリン」「吉田路線」と呼ばれる)路線であったと評される。この視点では、鳩山一郎、石橋湛山、岸信介、といった歴代内閣の政策、憲法改正や安保改定という政治路線とでもいうべき政策は、吉田路線からの逸脱と位置づけられる。即ち、吉田路線とは、池田、佐藤といった吉田の系譜に属する人々の視点から語る戦後史に他ならない。そこで、後に反吉田の象徴となった鳩山一郎を中心に論じることにより、戦後政治をバランスの取れたものに修正することが出来ると考える。あわせて第二保守党系の政党と協同党系の政党を戦後政党史の中に位置づける。自由民主党以前の諸政党の政策や組織を明らかにすることで、戦後政党史の欠落を補うことができよう。できれば「保守本流」「55年体制」といった概念についても論じたい。以上の関心のもとに、私は「鳩山一郎と戦後政治」と題した博士論文に取り組もうと考えている。

【研究の内容・方法】

鳩山一郎の伝記的研究でもあるため、特に周辺資料について収集を進めた。鳩山会館に協力いただき、所蔵されている「鳩山一郎関係文書」を使用する。また鳩山内閣関係者のご遺族へも働きかけた。次に、自由党系のみならず第二保守党系といった諸政党に関しても資料収集をすすめた。ご協力いただいたのは旧民政党本部があった櫻田会である。私の研究は、政党の来歴を辿る事により政党組織や政策形成過程に着目する。保守合同における自民党の政策形成過程、及び政党組織の発展、派閥を学術的に意味づけることを目的としている。積極的に資料収集をすすめ、特に、未だ全てを収集されていない政党機関紙について集中的に収集を考えていたが、成果はうまくあがらなかった。以上が文書資料に関する状況である。

次に、近年盛んになっているオーラルヒストリーの手法や成果を積極的に取り入れた。ご遺族のみならず、戦後の証言者と言える政治記者を対象に、積極的にインタビューを試みた。特に政治記者OB会のご協力を得た。オーラルヒストリーは文書資料を補完すること、もしくは新事実の発掘として役に立つ。

以上の資料や方法を使用し、戦後の鳩山一郎の政治行動について研究を進めた。まず、鳩山が戦後自由党を結党する時点を扱った。戦前の政友会の党組織と戦後の自由党の党組織を比較し、また結党の過程や役員人事を見ることで、特に党三役の役割・権限に着

目した。鳩山が公職追放された後は、吉田の支配する自由党の変容を考察した。幹事長や総務会長、政調会長といった党三役のキャリアパスを検討することで、吉田による党支配の確立過程を検討した。公職追放解除後の鳩山と吉田の抗争、そして鳩山側の挑戦を退けた吉田による党則改正、鳩山による日本民主党の結党、鳩山内閣の成立、日ソ交渉、更には鳩山後継の総裁公選までの期間を、鳩山に視点を設定して研究をすすめる。

【結論・考察】

鳩山の視点に立つことで戦後政党史を明らかにできた。第一に自由党の変容である。鳩山が創設した自由党は、鳩山私党と揶揄されるほど、鳩山との結びつきが深かった。吉田が総裁として勢力を拡大する過程では、いわゆる吉田学校の優等生、池田や佐藤に焦点が当たる。しかし実態を検討すれば、鳩山系を代表した大野に対抗するために、吉田が広川を新たな党人派として重視したことが分かる。そして、幹事長という役職が強大な権力を握ることになったことも分かった。以上のように、政党史研究上に意味のある知見も得られた。第二に、第二保守党系と鳩山との関係に関しては今後の課題である。ただ、鳩山が総裁となった日本民主党は、第二保守党系の党組織論とは違ったものであることが不十分ながら判明した。反吉田の象徴としての鳩山は戦後史の中で、まだ十分に位置づけられていない。政策面も含めて、鳩山の政治史的位置づけに関して考察をすすめたい。